資料２

1【令和７年度　山の下地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要
＜2021～2026＞

【目指す姿】 年をとっても、障がいがあっても安心して暮らせるまちに！	
推進目標1:地域の問題解決のための会議を開催しよう	推進目標2：顔の見える関係づくりをしよう
● 自治会長と民生委員の懇談会を通じ、顔の見える関係による相談体制が構築されている。 ● ゴミ出し支援事業を活用し、庭木伐採や清掃を地域ボランティアで行う具体策が進展している。 ● 友愛訪問では、日中の不在や業者の勧誘との誤解が課題。身分証の作成について検討が必要。 ● 除雪などの日常の困りごとの課題に対し、中学生の力や行政との連携を強化し、解決する。 ● 個人情報保護の考え方により、施設や病院の入退所把握が困難な中、近隣の「気付き」による孤立防止が重要。	● 小学校を活用したり、落語等のテーマを設けたりと、地域の茶の間への参加の動機付けを工夫。 ● ハロウィンや BBQ 等のイベントを通じ、若い世代の巻き込みと担い手育成に成功。 ● 集会所がない町内は、公園活用や他町内との合同開催により交流の場を確保している。 ● 行事の参加者の固定化に対し、役員が未参加世帯へ直接声を掛けている。 ● アパート住民や転入者など、日常的な接点が薄い層との繋がりづくりが今後の課題。
推進目標3：災害時、要支援者への対応や協力体制の整備をしよう	
● 地域合同訓練により、避難所の鍵の解錠方法など実戦的な知識の共有が進んだ。 ● 津波到達の早さから「自助」を優先しつつ、その後の安否確認ルールの確立が急務。 ● 要支援者名簿の活用と、支援を担う役員の精神的負担を軽減する仕組みを模索。 ● 避難場所の設備不足や渋滞対策は地域で完結せず、行政への継続的な要望が必要。 ● 冬季の災害（大雪）に備え、若い力を活かした除雪ボランティア体制の構築を検討。	

2【令和７年度　桃山地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要
＜2021～2026＞

【目指す姿】 地域全体で協働し、地域交流の活発なまちに！	
推進目標1:問題をみんなで共有し、地域で顔が見える関係づくりをしよう	推進目標2：次世代の担い手を育てよう
● 桃山プロジェクトにより、ゴミ屋敷やひきこもり、困窮世帯の存在が可視化された。個人情報の扱いについて民生委員の守秘義務等もあるため、情報共有と対応を今後どのようにしていくか。 ● 男性の一人暮らし世帯への訪問は心理的ハードルが高いが、ヤクルト配布等の「物」を介した接点づくりや、電気の点灯確認など、相手に合わせた地道な工夫が重要である。 ● 世帯票がない町内では新住民の把握が難しいため、挨拶回りの方法や町内ルールを伝える「世話焼き役」を通じ、隣近所との関係性を構築する必要がある。	● 中学生ボランティアがイベント運営に定着し、成長して戻ってくる好循環や、子どもの行事を機に親が役員に就く事例など、多世代交流による育成が成果を上げている。 ● 若年層や現役世代の継続参加には、土日開催や「短時間・限定的」な役割提示、SNS での広報など、負担感を感じさせずメリットが伝わる運営上の工夫が不可欠である。
推進目標3：地域で見守り・助け合いができる環境づくりをしよう	推進目標４：町内の人たちが気軽に集う場所をつくろう
● あゆみ会や民生委員による見守り活動が、子どもの見守りや地域情報の収集源となっており、学校との連携を深めることで「地域全体で育む」土壌ができつつある。 ● ゴミ捨てや除雪、住宅修繕など、ボランティアだけでは対応が難しい実務的ニーズが増えており、社協や専門機関と連携した役割分担と、有償化を含めた仕組み作りが急務である。 ● 役員の高齢化や人手不足が深刻だが、役員体制の整備や対面型の交流の再開を通じ、「ちょっとしたことを頼り・頼られる」温かい関係性の定着を目指す。	● 集会所がないエリアでは、空き家や施設空きスペースの活用を望む声もあるが、資金面や仲介組織の不在、補助金の継続性などが大きな壁となっている。 ● 地域の茶の間は交流の拠点となる一方、参加者の固定化や、男性が入りにくいといった課題もある。講座や発表会の開催などプログラムの工夫が求められている。 ● 夏休みの集会所開放やラジオ体操など、町内の垣根を越えた多世代参加型活動は、一部の役員に負担を集中させない持続可能な運営が鍵となる。

３【令和７年度　東山の下地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要
＜2021～2026＞

【目指す姿】 地域の力を総動員して、全地域で見守り・生活支援活動ができる東山の下にしよう！
推進目標1:コミ協と自治会・町内会単位で仕組みを作ろう
● 情報共有と連携の強化：民生委員が自治会の役員会に出席するなど双方向の連携が始まりつつある一方、個人情報の壁や「周りに知られたくない」層、非加入世帯へのアプローチが課題となっている。 ● 拠点の充実：コミ協地域の茶の間「こもれび交差点」や各町内の茶の間が情報交換の場として機能しているが、担い手不足による団体の解散や、固定化・高齢化する参加者が課題。 ● 移動・生活支援：デマンドタクシーの社会実験は継続意向がある一方、予約の不便さや予算管理に課題がある。ゴミ出しや除雪等の支援は、受ける側の「遠慮」を払拭する意識醸成が必要である。 ● 担い手確保：役員のなり手不足は深刻だが、PTA や現役世代を巻き込んだ横のつながり作りや、親世代からの声掛けによる若層の引き込みについて取り組みをすすめたい。
推進目標2：子どもから大人まで顔の見える関係づくりをしよう
● 多世代交流の継続：東山の下フェスティバルや餅つき、三世代交流会は、若い世帯や子供を地域に引き込む大きな機会となっており、準備段階からの協力依頼が新たな担い手発掘に繋がっている。 ● 防災を通じた絆づくり：1 町内 1 防災士の目標をほぼ達成し、小中学校での防災授業も定着しつつある。今後は防災士と民生委員が連携し、要支援者の名簿活用や個別避難計画へ繋げていきたい。 ● 居場所の創出と訪問活動：元気な人だけでなく、外に出ない層への「友愛訪問」や傾聴ボランティアの重要性が共有された。自治会館の常時開放など、子供から高齢者までが自然に集まれる場作りの検討が必要。 ● 見守り活動の深化：登下校の見守りや会費徴収時等の対面機会を大切にし、異変に早く気付く体制を維持する。ボランティア側のメンタルケアや意識醸成も今後の課題として挙げられた。

4 【令和 7 年度　下山地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要
＜2021～2026＞

<table>
<tr><td colspan="2">【目指す姿】 地域住民が健康で住みやすく、あいさつが活発なまちに！</td></tr>
<tr><td>推進目標1: 自治会・町内会と民生委員・児童委員との連携を深めよう</td><td>推進目標2：顔の見える関係づくりを目指そう</td></tr>
<tr><td>● 民生委員の認知度向上のため、広報紙での紹介、自治会組織（防災や育成部）への参画など、顔が見える関係づくりを強化する。
● 役員と民生委員の兼務により情報共有を円滑にしている地区がある一方、守秘義務や個人情報の取り扱いの解釈が連携の障壁となっている現状がある。
● 民生委員のなり手不足が深刻であり、特定の個人に負担が集中しないよう自治会全体で支え合う体制を検討する。
● 三者連絡会議を形式的な場ではなく、各々が抱える課題を協議し合う場としての開催方法を模索する。</td><td>● 子ども食堂の新規開設や、登下校の挨拶運動、青パト活動を通じた多世代交流を推進し、いざという時に助け合える地域の結束力を高める。
● 令和 7 年度から「ふれあい給食会」を会食形式で再開し、移動支援と組み合わせて高齢者の外出機会を創出できている。
● LINE グループを活用した防災・防犯情報のリアルタイム共有や、ゴミ出し支援を通じた若い世代との交流など、ICT や個別支援をきっかけとした繋がりづくりが見られた。
● 見守り活動の担い手不足や、役割の不明確さを整理し、持続可能な体制を構築することが課題となっている。</td></tr>
<tr><td colspan="2">推進目標3：地域の茶の間の開催、活用の見直しをしよう</td></tr>
<tr><td colspan="2">● 参加者の固定化や高齢化を防ぐため、スマホ教室、麻雀、健康講座、季節のイベントなど、男性や新規層が関心を持ちやすい多彩なプログラムを取り入れる。
● 助成金の人数要件に縛られすぎず、少人数からの「スモールスタート」や、出入り自由な居場所づくりを推奨し、開催のハードルを下げる。
● 学校の空き時間利用やスポーツセンターとの連携、送迎の実施など、物理的に集まりやすい場所や手段を工夫する。
● 子育てサロンなどの既存事業を、時代のニーズに合わせてボランティアの集いや多世代交流の場へと柔軟に形を変えて継続していく。</td></tr>
</table>

5 【令和 7 年度　紫竹中央地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要
＜2021～2026＞

<table>
<tr><td colspan="2">【目指す姿】 住んでいる人みんなが「幸せだなぁ」と感じられるまちに！</td></tr>
<tr><td>【テーマ】：地域の茶の間の運営について</td><td>推進目標2：災害時の助け合いの基盤をつくろう</td></tr>
<tr><td>● 2 年間無事故で運営され、地区外からも利用者が訪れるなど「誰もが集える場」として定着している。
● 参加者は 80 代前後の方が多く、会場の広さ（アパート等）から新規参加者の受け入れが難しいことが課題。
● 若い世代や男性が入りやすいよう、各種講座など「喋るだけ」ではない内容の充実が必要。
● 運営継続に向け、参加費や茶菓子の提供方法の見直しの検討や、役員の負担軽減に向けた当番体制の工夫が必要。</td><td>● 「備えあれば患いなし」の精神で、自主防災組織による平時からの啓発と避難訓練への参加促進を重視する。
● 個人情報は「助け合い目的」の共同利用であれば法的に問題ないとの認識を共有し、本人同意を得た名簿作成を推進している。
● LINE や無線機の活用、リーフレット配布など、地区の実情に合わせた情報伝達と周知の方法を模索している。
● 自助として 3 日分の食糧確保を周知するとともに、アパート住民や若年層など把握しにくい世帯とのつながり作りが課題。</td></tr>
<tr><td colspan="2">推進目標3：顔の見える関係づくりを進めていこう</td></tr>
<tr><td colspan="2">● 子どもから不審者と誤解されないよう配慮しつつ、大人同士がまず心を通わせることをめざす。
● 集会所や茶の間を活用した三世代交流（餅つき、ボウリング等）を継続し、多世代が顔見知りになる機会を作る。
● 江南小・沼垂小の 2 つの校区を跨いだ合同イベントや、子ども会との連携を強め、子育て世代との接点を増やしたい。
● 世代間の価値観の差や衛生面への配慮など、現代のニーズに合わせた行事内容の工夫により、地域のつながりを再構築していく。</td></tr>
</table>

6 【令和 7 年度　木戸地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要
＜2021～2026＞

【目指す姿】 安心して暮らし続けることのできる便利で楽しいまちに！
【木戸地区は推進目標2～3を中心に話し合いました】
推進目標1: 健康寿命の延伸～体が資本、体力を落とさない！
推進目標2：地域を支える担い手を育てよう～楽しくなければ集まらない！
● 若い世代の参加を促すため「青年部」の立ち上げや、温泉旅行・映画・親子遠足など多彩な行事を模索している。 ● 中学生を地域の重要な戦力と捉え、防災訓練での炊き出しや車いすの昇降訓練に準備段階から関わってもらう成功事例がある。 ● 育成協のクリーン作戦には親子 100 名規模の参加があり、学校経由の周知や飲食・景品といった広報方法の見直しや当事者が参加するメリットを提示する重要性が確認された。 ● 役員の負担軽減のため、除雪や側溝掃除の業者委託、民生委員の業務マニュアル化による「見える化」などの対応が検討された。 ● ボウリングや吹き矢、野菜作りなど、参加者自身の健康や楽しみにつながる活動は担い手が定着しやすい。
推進目標3：地域のつながりづくりを進める！
● 挨拶は自分から」を基本としつつ、子どもが地域の見守る大人と一目でわかる共通の帽子やジャンパー、ベンチコート等の着用も方法のひとつか。 ● 登下校の見守りを 10 年以上継続し、家まで迎えに行くほど子どもと深い信頼関係を築いている事例が共有された。 ● 自治会長と民生委員の連携を深めるため、次年度早期の懇親会開催や定期的な情報交換の場を設けたい。 ● 学校内に自治会長の顔写真マップを掲示するなど、顔を覚えてもらう工夫を継続し、地域全体で見守る体制をつくっている。 ● 宅地化により祭りやラジオ体操の会場となる公園や広場が消失しているため、地元神社や企業の敷地活用など新たな連携が求められている。

7【令和7年度　牡丹山地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要

＜2021～2026＞

【目指す姿】みんながいきいきと生活しているまち	
【牡丹山地区は推進目標3を中心に話し合いました】	
推進目標1: 安心して暮らせる まちづくりをしよう	推進目標2：地域の茶の間・居場所を活用しよう
推進目標3：地域で情報を共有しよう	
〇民生委員と自治会の連携体制 ・ コロナ禍を経て会議や懇親の場がなくなり、両者の関係が「点」に留まっている。自治会の総会に民生委員を招くなど、まずは「顔の見える関係」の再構築が必要となっている。 ・ 「個人情報の壁」を意識するあまり、必要な情報の共有までできていない。守秘義務を前提とした、地域の実情に即した情報共有の仕組みづくりがあると良い。 〇支援が必要な世帯の把握と見守り体制 ・ 高齢者の一人暮らしや、自治会未加入のアパート住民、若年世帯の状況把握が困難。ポストイン不可の物件や近所付き合いを望まない層へのアプローチが共通の悩みとなっている。 ・ 役員の交代や担い手の高齢化が深刻なため、情報の集約先を整理し、包括支援センター等とスムーズに連携できる体制を築くことで、地域活動の負担軽減を図っていく。 ・ 要支援者名簿と実態の乖離をなくすために個別訪問などの地道な取り組みを積み重ねながら、日頃から「助けて」と言い合える顔の見える関係を築くことで、実効性の高い見守り・防災体制づくりに向けて取り組んでいく。 〇生活支援と多世代交流の現状 ・ 「思いやり応援隊」等によるゴミ出し支援が一人暮らし高齢者の孤立を防ぐ大きな助けになっている。一方で、行政のごみ出し支援事業は手続きが煩雑のため利用が進んでいないエリアもある。 ・ 寺山公園や「こい来いフェスタ」は、中学生ボランティアも含めた多世代交流の貴重な場となっている。こうした拠点を活かし、男性や若い世代も気兼ねなく参加できる居場所づくりが期待されている。	

8 【令和 7 年度　大形地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要
＜2021～2026＞

<table>
<tr><th colspan="2">【目指す姿】 誰もが安心して住むことができ、多世代交流の活発なまちに！</th></tr>
<tr><th>推進目標1:地域のつながり、顔の見える関係づくりを推進する</th><th>推進目標2：安心安全なまちづくりを進める</th></tr>
<tr><td>● 「地域の茶の間」は多世代交流の拠点として重要だが、参加者の固定化や、未開催地区での立ち上げ、休止箇所の再開が課題となっている。
● 専門講師やサークルによる講座（防災、防犯、健康、昔語り等）を茶の間に取り入れ、参加のきっかけを増やす工夫が必要ではないか。
● PTA や育成協が中心となり、30～70 代の現役世代を巻き込んだ強力なネットワーク構築や、餅つき等のイベントを通じた「大人が楽しむ姿」を見せる活動が成果を上げている。
● 学校の文化祭や施設開放を活用し、地域住民が自然に学校へ足を運ぶ機会を増やすことで、顔の見える関係を築いていきたい。</td><td>● 登下校の見守りや挨拶運動は長年継続されているが、ボランティアの高齢化や、挨拶を返さない子ども・保護者への対応などが課題。
● 通学路や夜道の安全確保のため、街灯の増設・LED 化、警察への巡回要請、回覧板による交通ルールの周知など、ソフト・ハード両面での対策を検討する必要がある。
● 避難所となる学校や施設のバリアフリー状況（トイレ、スロープ等）の事前周知や、要支援者名簿の更新・共有における民生委員との連携が災害時の命を守る鍵となる。
● 若年層への情報伝達として、コミ協ホームページの立ち上げや SNS の活用、デジタル化による避難情報の共有を検討している。</td></tr>
<tr><th colspan="2">推進目標3：支えあいのしくみづくりを推進する</th></tr>
<tr><td colspan="2">● 自治会長のなり手不足や役員の 1 年交代制など、持続可能な運営体制の構築が喫緊の課題であり、現役世代でも関わりやすい仕組みづくりが必要。
● 子ども食堂が、物価高に悩みつつも多世代が交流する新たな居場所として機能しており、地域農家からの寄付やフードバンクの活用といった資源循環が期待されている。
● 独居高齢者の孤立死を防ぐため、民生委員や包括支援センターと連携し、近隣住民が「気になる人」をさりげなく見守り、つなぎ合う体制を深化させる。
● 「助けを求める力（受援力）」が弱い若い世代や、ひきこもりがちな高齢者の参加促進に向けて、名称の工夫や Wi-Fi 整備など、時代のニーズに合わせた居場所作りを模索する。</td></tr>
</table>

10【令和７年度　中野山地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要

＜2021～2026＞

【目指す姿】 安心して暮らしつづけたい美しいまち	
推進目標1: 顔の見える関係づくりを推進する	推進目標2：非常時にも対応できる仕組みづくりを推進する
・ゴミ出しや除雪の支援については、支援制度が既に存在し、ホームページや配布物による周知も行われている。しかし、実際の支援につながるためには、自治会など地域の近いところでの動きが不可欠である。 ・自治会単位で地域をしっかりと把握し、困っている人が声を上げやすい環境を整えていくことが重要である。「助けてほしい」という声をどのように吸い上げるかが課題であり、そのためには“向こう三軒両隣”のような日常的なつながりが大切になる。	・小学生から高校生まで、学生が参加できる地域貢献活動を広げていきたい。 ・中野山地区では、独自に 75 歳以上の高齢者の名簿を作成している。地域の支援につながる個人情報を適切に共有できる体制づくりが重要である。 ・名簿やデータベースの整理は必要だが、管理には限界があるのも事実である。最終的には日常的な見守り意識が不可欠であり、その意識づけが地域づくりの基盤となる。
推進目標3：気軽に誰もが集える居場所づくりを推進する	今後の広報について
・フリースペースは「親子で安心して過ごせる場所」として徐々に認知されてきている。時間をかけて地域に知られていくことを実感しており、当初の目指していた姿に近づいている。常設運営が理想だが、資金・人手の問題で難しい。足を運びやすい会場を考えることも必要。 ・フレイルチェックの参加者の多くが「しゃっきり体操」へ移行している。「健康長寿中野山」には毎回 20～30 人が参加している。年齢にとらわれず、若いうちから健康意識を育てることは重要。世代を超えた健康づくりの場として発展させることが求められる。	・広報手段としてホームページ（HP）の活用を検討している。しかし立ち上げ費用・維持費が高い。助成金があれば導入しやすい。 ・紙媒体の広報は若い世代がどれほど見ているか不明で、効果が限定的。興味や必要性があれば若い世代は自ら検索して情報を得るだろうという見方もある。 ・HP は音声読み上げ機能が使えるため、視覚に不安のある人にも情報が届きやすい。 ・広報手段が変わっても、取り組む内容や目標そのものは変わらない。

11 【令和 7 年度　南中野山地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要
＜2021～2026＞

【目指す姿】 ちょっとした困りごとは地域住民同士で解決できるまちに！
【テーマ】 これからの居場所づくりについて
子ども食堂 •多世代が交流する「第 3 の居場所」として定着し、地域が良くなっている実感が共有された。 •調理体制の維持や担い手の高齢化が課題。 •困窮を前面に出さない「地域食堂」への転換や、参加した子が将来担い手として戻る循環づくり、全住民への周知が必要。 地域の茶の間 •徒歩圏内の身近な居場所として重要。茶の間を起点とした助け合いが本来の目的と再確認。 •参加者の固定化を防ぐため、席のくじ引き等の工夫が紹介された。 •足腰の衰えや降雪で来られない人への送迎、欠席者への声掛けなど「連れ出すサポート」が孤立防止につながる。 認知症カフェ •新たな立ち上げに向け、名称の工夫や専門職との連携を模索中。 •認知症になっても地域で安心して過ごせるよう、周囲が温かく受け止め、気にかける寛容な土壌づくりが不可欠。 •本人が動くのは難しいため、家族や近隣が寄り添う心理的支援が求められる。 自治会・町内会 •担い手不足の中でも、見守りや除雪など地域福祉の基盤を担う。 •民生委員と連携し、些細な情報を共有する連絡体制や、若手会長を支える体制が見られる。 •アパート住民への情報周知や自治会加入拒否への対応が課題。管理会社との連携や、回覧板に頼らない関係構築が必要。 その他 •部活動地域移行に伴う「中学生の放課後の居場所」が新たな課題。 •民間施設の活用や、公園での自然発生的な集まりなど、柔軟な場の可能性が広がると良い。 •主任児童委員と学校の連携や、防災訓練を通じた平時からの関わりが、自ら声を上げられない人を救う鍵。

９【令和７年度　江南地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要
＜2021～2026＞

【目指す姿】 安全で住みやすく、安心な暮らしのできるまちづくりを！

【テーマ】 地域の防災について考えてみましょう

- **避難支援の不安**
  - 要支援者名簿を基に見守り体制を作っている自治会もある一方では、災害時に誰がどこまで支援できるのかという不安がある。
  - 日頃の近所付き合い・声かけが減っており、災害時に助け合える関係性が弱まっているのではないかということや「向こう三軒両隣」や班単位での顔の見える関係づくりが必要との意見があった。
- **自治会ごとの取り組み状況**
  - 自治会の体制や会長任期の違いにより、自治会単体での防災に関する活動内容にばらつきがある現状がみられた。一方、複数自治会で防災訓練に取り組んでいる現状もある。
- **学校と地域の関わりの必要性**
  - 地域の担い手として若い世代、中学生の力を期待する声が多い。
  - AKG 活動や多世代交流行事、既存行事を活用し、防災につなげる意識づくりや中学生等参加者が役割を持つ工夫が必要。
  - 学校の避難訓練と地域（自治会）の訓練が別々で、情報共有が十分でない。
  - 土日や放課後など「学校にいない時間帯」の災害に備えて子どもたちにも自治会の訓練に参加してもらいたい。
- **避難所運営に関する不安**
  - ペット同行避難の実際の運用がイメージできていない。
  - 備蓄品や避難所体制について、地域住民の理解が十分でない。
- **日常活動と防災の接続**
  - 地域の茶の間、見守り活動、生活支援（雪かき・草取り）など、平常時の住民主体の活動が災害時にも活きるとの認識。また、活動時の災害に備える必要もあるのではないか。
  - 日常の名簿管理や連絡先把握が災害対応に役立つ。
- **基本は「自分の身を守る」こと**
  - 発災直後はまず自分の安全確保が最優先。その上で、落ち着いた段階での声かけ・確認・助け合いが重要。

12【令和7年度　東中野山地区】東区地域ふれあいプラン地区別計画座談会グループワーク意見概要

＜2021～2026＞

【目指す姿】 誰もが安心して住み続けられるまちを目指して！

【テーマ】 民生委員・児童委員の選出について

1. 民生委員の担い手確保・後継者問題

- 定年や改選を見据えた後任選定が非常に難しいとの声が多い。また、引き継ぎ期間がなく、いきなり担うことへの不安が大きい。
- 協力員制度の活用、引き継ぎ期間の明確化、勉強会・体験的な関わりを通して活動の見える化と負担感の減少を図っていく仕組みを地域で共有する必要がある。
- 活動内容が分かりにくく、「大変そう」というイメージが先行している一方、実際に活動している立場からは「やりがいがある」「楽しい面も多い」との意見がある。プラスのイメージも広報等工夫して伝えていく必要がある。

2. 自治会と民生委員の連携

- 役員会への参加、同行訪問は民生委員の顔の見える関係づくりや見守り活動の理解に有効だが、すべての地区で実施しているわけではない。民生委員が自治会活動に関わっている地区は、情報共有が円滑との声がある。
- ひとりの民生委員が複数自治会を担当する体制や、役員交代の頻度により自治会と民生委員との関係が途切れやすい。しかし、自治会長と民生委員の連携は不可欠という認識は共有されている。

3. 活動内容・役割の「見える化」

- 民生委員の業務内容が分かりにくく、候補者や周囲の人に説明しにくいところがある。
- マニュアル化は難しい面もあるが、活動量や具体例の共有は必要ではないか。
- 広報紙、回覧板等多様な媒体を活用した継続的な周知が求められている。

4. 個人情報・名簿の扱い

- 守秘義務を重視しすぎて、本来の支援や見守りに必要な情報まで共有されないとの懸念がある。
- 一律に「出せない」ではなく、本人や家族の意思表示など最低限の背景説明が欲しいという声があった。
- 要支援者名簿・高齢者名簿などが分散し、活動負担が大きい。自治会と民生委員での名簿整理・共有の在り方が課題。

5. 行政や関係機関への要望

- 文書通知等、事務的なかかわりのみで、地域や民生委員に任せきりではないか。
- 定数の柔軟な見直し、サポーター制度など区独自の工夫を求める声があがった。
- 職員が地域に出て、顔の見える関係を築いてほしい。お互いに頼み合いにくいのではないか。
- 民生委員活動の広報や説明への積極的な関与をしてもらいたい。